
カードキャプタープリキュア外伝～小説家の試練～

雪崎 義章

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードキャプタープリキュア外伝〜小説家の試練〜

【Nコード】

N9320F

【作者名】

雪崎 義章

【あらすじ】

大川勇輝先生原作、「カードキャプタープリキュア」から小説執筆に携わる者に影響のある作品をリメイクしてみました。小説家を目指す少女「秋元こまち」をめぐる出来事。

第一話・それは一つの言葉より（前書き）

本作品は「カードキャプタープリキュア」を原作者大川勇輝先生の許可を得て執筆しました。TV版第16話がベースですが、小説への酷評がどのようになるか？書く方も読む方もリアル世界ではどうか一度考えて下さい。

第一話：それは一つの言葉より

とある日のナッツハウス、皆が美味しそうに和菓子を食べる中、一人の女性が原稿用紙を手に読みあげていた。彼女の名前は秋元あきもとこまち、小説家を目指している大地のプリキュア戦士である。

「嵐の中今にも転覆せんとするところ、追い打ちをかけるよう海賊船が現れた。絶望する乗客たち！」

他の五人はこまちが読んでいる自作小説『海賊ハリケーン』に聞き入っていた。特にさくらはこまちの意外な才能に驚いている。

「それで!？」

「こまちさん! はやくはやく!」

こまちを急かすのぞみにげんこつを入れようとするりん、すかさずさくらが止めに入る。

「まあまあ……皆さん静かに聞かないとこまちさんもお困りでしょうから……」

一同、席に座るとこまちの続きを待つ。その態度の急変に戸惑ったこまちであったが、改めて続きを語る。

「えっ……その絶望的な状況に乗客たちが騒ぐ。『助けくれ! もうだめだ!』と……」

そしてこまちは原稿用紙をめくると力強く続きを……。

「しかし一人だけ絶望していない若者が居た。力強く皆を勇気付ける。『おしまいではない!』と自らこの状況化でも希望を失っては
いない」

こまちはそこまで読むと原稿用紙を閉じた。

「えー! こまちさん、続きは?」

「のぞみさんごめんなさい、今書いてる途中なのよ」

せかすのぞみにこまちは相変わらずのおっとりした口調で告げる。

「えっ読みたい! 読みたい!」

まるで子供のように駄々をこねるのぞみとあきれた様子でその様

子を見ているりん。

「それにしてもこまちさんがこのような冒険小説を書くなんて意外でしたね」

横に座っていたうらははこまちに訊ねる。そしてその直後にさくらが聞いてくる。

「小説のジャンルは冒険物が主体なのでしょうか？ 魔法ファンタジー物でしたらお力になれるかも……」

彼女の言葉とおり、カードに込められた魔力を操るカードキャプター『さくら』は実在の魔法使いと言える。

「特にジャンルはこだわりのないのよ。次は恋愛小説も書いてみたいし……」

「れっ恋愛ですか!？」

こまちの回答に皆が大声をあげる。中学生で恋にあこがれる彼女達にとってはこの二文字『恋愛』は心に響いた。

「誰かモデルでも居れば……」

こまちはさくらを見つめるが、そのターゲットとなったさくらは慌てて首を左右に振る。

「まあ、兎に角『海賊ハリケーン』が終わった後ね。そのころにはこまちにも良い彼氏がいるかも」

冷やかすのはかれん、しかしこまちは黙り込んで恥ずかしそうに下を向く。

「そうそう、そうなればモデルは要りませんね」

追い打ちをかけるのはうらら。しかし彼氏無しフリーの六人は自分たちで盛り上げた話にただため息をつく。

「しかしこまちさん、すごいよねー」

相変わらず能天気なのぞみか話しかける。

「だって、こんなにたくさん文章書けるなんて」

このとぼけた言葉にりんがぼそりと。

「誉めるとこ、そこかよ……」

その時のぞみの横に座っていた小々田が皆に提案する。

「せつかくだからナッツにも読んでもらったらどうか？ あいつはパルミエ王国でも一番の読書家だったし……」

一階から丁度上がってきたナッツを呼ぶ。

「なんだ？ 俺に用事か？」

上がってきたナッツはテーブルにある豆大福を一口に入れると、椅子に座る。その彼のもとへ原稿を差し出すこまち。

「よかつたらナッツさんも読んでみて。感想を聞かせてもらえたらうれしいわ」

ナッツは原稿用紙を受け取ると“わかった”とだけ言い原稿用紙に目を通し始める。その間皆がお茶菓子を食べながら話を始める。

先ほどの恋愛小説はのぞみと小々田が良いなど冷やかされ、両者赤面しながら慌てて否定するなど盛り上がっていた。しかし唯一人さくらは険しい表情で原稿用紙をめくっていくナッツを気にしていた。

そしてこまちがのぞみの父、彼は絵本作家であるが、について話していた時であった。ナッツは原稿用紙を“パサリ”と閉じる。

「えっもう読んじゃったの！」

「はやっ！」

驚くりんとのだぞみにナッツは無言で頷く。

「どうでした？」

嬉しそうに聞くこまちであったが、ナッツの感想は意外な言葉であった。

「何が言いたいのかわからない……」

「えっ！」

「こまちがこの物語で、読者に何を訴えたいのか……テーマが見えてこない」

表情を変えず淡々と酷評を語るナッツ、こまちは慌てて説明する。

「あっえーと、それは……」

「説明しなければ分からないのなら、これを読む意味は無い。本にする価値は無い」

ナッツは厳しくこまちの作品を評価すると原稿用紙を渡す。友人

の作品に冷たい評価を下したナッツをのぞみとりんが問い詰める。

「ちよつとナッツ！」

「あんた何言つてんのよ！」

ナッツは意外そうな顔をしていた。何しろ彼は作品への感想を聞かれたからそう答えただけ。

「何って感想だが……」

続けて、かれん、うららも反論する。自分たちは楽しく読めたと……。そしてさくらも同感。しかしナッツの言い分は彼女たちの評価には友人としての鼻眞目ひしきめがあると。とどめは次の一言。

「決して良い作品とは言えない」

この言葉に何とか自制心を保っていたこまちもとうとう耐え切れず、帰ってしまった。

「あつこまち！ 待って！」

かれんは、すぐさま後を追った。さくらも追うつもりであったが、その前にナッツに言っておくべき事があった。ただしさくらがそれを言う前へのぞみ、りん、うららの三人はナッツに物凄い剣幕で食ってかかっている。

「何であんなことを言ったの！？」

「あんな言い方はないでしょう！？」

「ひどすぎます！！」

それに対しナッツは少し動揺しながらも切り返す。

「本当の事を言ったただけだ。間違った事はしていない。それとも俺に嘘をつけどでも言うのか」

あくまでナッツは冷静に答える。

「しかし物事には言い方がありますわ！」

そのさくらの一言に皆が振りむく。

「さくらさん？」

「確かにナッツさんのおっしゃる通り、のぞみちゃん達の見方には鼻眞目ひしきめがあったのは事実でしょう」

「ちよつとさくらちゃん！」

「けどね！」

のぞみとりんが反論しようとするが、さくらはその二人を制する。そしてするどい目つきでナッツを睨む。

「でも……」

さくらが言いかけるとのぞみとりんはそれ以上反論しない。二人が黙るのを確認したさくらは話を続ける。

「『何が言いたいのかわからない』などという言い方はこまちさんの立場からすれば『自分には小説を書くセンスがない、辞めるべきなんだ』と言われたも同然」

険しいナッツの表情が変わり、黙り込んだ所でさくらは続ける。

「ナッツさん！ あなたの言葉はこまちさんの『心』を傷つけた最低の言葉です！」

さくらの厳しい言葉にナッツは目をそむけ、ボソリと言う。

「お、俺は別に、そんなつもりでは……」

言葉を濁し黙り込んでしまったナッツに容赦なくさくらは続ける。「ナッツさんからして見れば、あくまでもあの小説を評価しただけで、こまちさんを傷つけるつもりで言った訳ではないでしょう」

「ああっそう頼まれたから」

「しかし、たったあれだけの言葉で、ただ読む価値がないと言うような言い方をされては、プロの小説家でもない限り、傷つくものです」

さくらはのぞみ、りん、うららの方を見るとゆっくりとしっかりした口調で話す。

「そしてこれはナッツさんや、のぞみちゃん達にも覚えていて欲しい事ですが、『言葉は時にはどんな刃物よりも危険な凶器となる』のです」

「言葉が凶器……」

その場にいた皆がさくらのこの言葉を深く受け止めた。特にナッツは中立的立場でこまちの小説を評価しただけであったが、まさか自分の言葉でこのような事態になるうとは思ってもみなかった。し

かし自分か下したこまちの小説に対する評価は間違っていないと信じている。

さくらはこまちを追いかけなるべく去ろうとしたが、最後にナッツに一言告げる。

「もし、こまちさんが小説を書く事を諦めていないのであれば……」

「であれば？」

「明日、こまちさんにあの小説の何が悪かったのか、詳しくアドバイスしてあげて下さい。ナッツさん」

「俺が？」

「そう、あと逃げないで下さいね。全ては貴方の言葉で起こったことですから」

さくらは言い残すとこまちの後を追いかけナッツハウスを出て行った。呆然と立ちすくむ三人を残し一階へと降りてきたナッツ。ここでは小々田が店のカウンターを掃除していた。さくらの言葉がかなりきいたのかナッツはゆっくりと小々田に話しかける。

「俺は間違っているのだろうか？」

いつも問題を自分で解決している彼が友人に相談することは滅多にない。

「そうだな、ナッツらしいなと……」

「俺らしい？」

「お世辞の一つも言えないほど不器用で、自分がこまちを傷つけたことに後悔しながらも自分の言ったことは間違いないと、そうだろ」

「それで？」

「なんなら手を貸してやってもいいんだが」

「誰がお前に！ 自分で何とかする！」

怒りながら店を出ていくナッツを目で追いながら小々田は思った。

（がんばれ……）

第二話：友人

それからしばらく後、こまちとかれんは近くの公園にいた。落ち込んだ様子のこまちを気遣うかれん。

「ほら人には好みがあるし、あの話はたまたまナッツの好みじゃなかったのよ」

友人を励まし、夕方の空を見上げるかれん。

「『海賊ハリケーン』私は好きよ！ 躍動感があって続きも読みた
いし……」

励ましてくれる友人にこまちは答える。

「かれん、心配しないで私は大丈夫だから……」

「本当？」

「もう帰らないと行けないでしょ。私も帰るから……」

「わかったわ。いつでも電話してね」

こまちの落ちついた様子に安心したのか、かれんは挨拶すると帰宅する。その友人の姿が見えなくなるとこぶしを握りしめ悲しみに浸る。

「私は……小説家失格なの？」

一方、こまちとかれんを追いかけていたさくらは結局二人を見つけて出すことが出来ず街中を彷徨さまよっていた。

「ここは空から二人の気を探して」

さくらは『翔フライ』のカードを取り出し空から二人を探そうと試みる。しかしカードの力を開放する鍵を手にした瞬間、背後から声をかけられる。

「むやみにこの世界で魔法を使うのはどうかな？」

「ナッツさん!？」

さくらが振り向くとやはりこまちを心配して出てきたナッツが居た。

「あの……先程はすみません。私言いすぎました……」

カードを収め、頭を下げて謝る彼女の姿にナッツは頷く。先ほどの元気もなく落ち込んでいる。

「謝る必要はないさ。それにこまちは強い女の子だから……きつと立ち直ってくれる」

ナッツはたくさんの本を持っていた。図書館で借りてきた物らしいがどれも『心理学』に関する物。ナッツは解決の糸口を本から導き出そうとしていたのだ。そのときさくらの携帯電話が鳴る。慌てて電話を取るさくら。

「はい、木之本きのもとですが、あつかれんさん？」

電話の相手はすでに帰宅していたかれんであった。帰りが別々になったので気になったのであろう。

「わかりました。私も帰りますので」

さくらは電話を切るとナッツに言う。

「かれんさんから伝言です。こまちは『心配しないで』と言っていたそうです」

このさくらの言葉にナッツは少しほっとする。

「そうか……」

「では明日またお会いしましょう」

そして別れようとするが、さくらが一言。

「女の子って弱いだよ、ナッツさん。貴方の言葉がこまちさんを強く出来ると思います」

「えっ！」

「では」

意味深な言葉を残し去っていくさくら。その姿を見つめながらナッツは呟く。

「俺の言葉が……」

そして夜のナッツハウス、二階で本を読むのに熱中しているナッツ。そこへ小々田が紅茶を持ってくる。

「ナッツ、余計なことかもしれないが、探し物は本では解決できないと思うな」

「どういう事だ？」

「これはお互いの心の問題。本ではなくナッツが思っていることを伝えれば良いと思うが……」

「俺が思っていること？」

「ああ、ナッツはこまちを応援したい、そうだろ？」

心境を見抜かれたナッツは、少し悔しい思いをしたが手にした本を閉じるとぼそりと呟く。

「ああ、俺はこまちを傷つける気持ちなんて毛頭ない。ただアドバイスをしてそれがこまちの励ましになればと思ったのだが……」

「それがキツイ言い方になって、けっきょくこまちを傷つけてしまった。そしてさくらに厳しい言葉をもらうことになったと」

「ああ……」

少し落ち込んだ友人を見ながら小々田は話す。

「相手のことを思っているから、時に言葉は厳しくなる事がある。

さくらがナッツに厳しいことを言ったのはこまちを、そしてナッツのことを気にしていたからだろう」

“相手のことを思う”これがナッツの心に響いた。もしあそこでのぞみ達と同じ作品評価をしていれば、こまちは嬉しかったのだろうか？ 後々のことを考えれば彼のアドバイスは必要だったはず。明日、こまちに会えたらもう一度話をしよう。ナッツはそう決意した。

「ココ、ところでさくらのことだが……」

「さくらがどうした？」

「最初知り合ったときは、のぞみ達とうまくやれるか心配したんだが……」

「そうなのか！？」

「今ではすっかり輪に溶け込んでいるというか、熱くなって俺に説教してきた時なんかもう立派なプリキュア部の部員だったからな」

ナッツの言葉に小々田は答える。

「まあ確かにそうだな。しかし彼女は異世界の人、そして僕たちもそれは同じなんだ」

「ココ……」

「いずれパルミエ王国が復活した時、僕たちはさくらとそしてのぞみとも……」

小々田は寂しそくに告げる。ドリームコレットで自分たちの夢が叶った時、待っているのは別れのはず。

「お前……」

悲しそうな小々田はしばらく黙っていたが、やがてその場を去った。“無理をするな”とだけ言い残し……。

その頃、さくらは水無月邸にて廊下から月夜を眺めていた。

「どうかしたの、さくら？」

驚いて振り向くとかれんが心配そうに見ていた。

「いやっ今日の事で私……」

「こまちのこと？」

さくらは黙ったまま頷く。

「こまちさんですが、私もナッツさんにキツイことを言ってしまった……」

「こまちなら大丈夫よ。きっと自分の夢を諦めたりしないと信じているわ。それにナッツにも良い薬になったはずよ」

かれんはさくらに友人達の事を話す。さくらはそんなかれんに質問する。

「こまちさんのこと信じているのですね」

「ええ、友達だから……」

かれんその言葉にさくらは自分の世界にいる友人達を思い出す。知世ちゃんや小狼君シャオロンはどうしているのだろう。沈んだ表情のさくらにかれんが訊ねる。

「さくらも早く自分の世界に帰れるといいわね。きっとあなたのことだから良い友人達が居るのでしょ」

「はい」

かれんはさくらの肩を叩く。

「大丈夫、私達が付いてるから」

その時であった。さくらの表情が変わり、己の魔力の源である鍵を手にする。その態度の急変にかれんが叫ぶ。

「まさか！ ナイトメア！？」

「ええ！」

実は庭で二人の様子を伺っていたのは、上司“ブンビー”の命により偵察に来ていた“アラクネア”であった。

「ちっ！ 気づかれたか！ さすがは魔法使いってところね。プリキュア同等にやっかいな存在」

アラクネアはその場を去り、さくらも警戒を解く。

「逃げたの！？」

「ええ、唯の様子見みたいでしたから」

さくらの答えにかれんは改めて目の前の少女『カードキャプター』の力に感心するのであった。

第三話：秋元まどか

翌日の放課後、こまちは皆とナッツハウスには行かず一人帰ってしまった。何やら用事があるからと本人は言うが、他の皆は昨日の事件を気にしているからと思っている。とくに昨日「大丈夫だから」と言われ安心していたかれんは、友人のその様子を心配していた。

ナッツハウスでは昨日借りてきた書籍をナッツが読んでいたが、小々田の言ったとおり解決策はない。謝るか？　しかし嘘をついたのなら兎も角、正直に言ったことを謝る理由はない。しかしさくらの言うように彼の言葉でこまちが傷ついたのも事実。彼はどうすればよいか迷っていた。そこへこまち以外のメンバーが入ってくる。

「いらっしやいませ、っってお前たちか……」

相変わらず無愛想なナッツにりんが一言。

「営業スマイルが足りないよ、ナッツ」

「ってじゃあどうすればいいんだ？」

「簡単簡単、こんな感じに」

りんはニツと笑ってみせる。その様子にあきれる他のメンバー。

「　　まあわかった、っでこまちはどうした？」

「　　なんか用事があるからっ」

かれんの答えに落ち込むナッツ。追いうちをかけるように、

「このままこまちさん来なかったら、……豆大福食べれなくなるね」

「おー！　それって大変だあ！」

りんとのおまの言葉に一瞬慌てるナッツであったが、わざと冷静さを見せる。その時であった。外からバイクの音が聞こえる。大型バイクの空冷エンジン特有の排気音である。

「なんだ？」

ナッツが外へと出る。続いて他のメンバーも追う。外には一人の女性ライダーが居た。バイクにまたがり、ヘルメットをかぶったままこちらを見ている。ナッツはその女性ライダーに注意する。

「おい！音が五月蠅いぞ！」

ナッツの言葉にそのライダーはエンジンを停止すると答える。

「私……客なんだけど……」

「客だろうと迷惑に変わりはない！」

毅然とした態度で警告するナッツの姿に皆が慌てる。

「ちよつとナッツ」

「お客さんに失礼でしょ。ほら営業スマイルだつてば」

のぞみとりんが止めに入るが、ナッツの態度は変わらない。

「人と話すときに顔も見せないような奴には礼儀など必要ない！」

ナッツのその言葉にライダーはヘルメットのバックルを外す。

「なるほどね」

そしてそのヘルメットから現れたライダーの顔は用事が有つて先に帰った『こまち』であった。ナッツ、のぞみ、りん、うららの四人が驚く。そしてそのライダーは次のように言う。

「あんたの言う通りだ。失礼を詫びるよ。悪かったね」

「こまちさん！」

「うそー！」

「つていうか用事があつて帰つたんじゃ……」

そこへかれんが一言。

「あの『まどか』さんですか？」

その『まどか』と呼ばれたライダーはかれんに答える。

「久しぶり、かれんちゃん。妹がいつも世話になつているわね」

「い・も・う・とー？」

驚いている四人に向かってそのライダーは自己紹介する。

「こまちの姉、『秋元まどか』よ。よろしくう！」

元気よくサムアップを見せるこまちの姉『まどか』、容姿はそっくりだが静かでおっとりしたこまちとはタイプが違う。しかしさくらには会ったときから彼女が別人であったことは感じていた。

（こまちさんとは読み取れる気が違ったから、やはり別人だったのね……）

そして自分のことに驚きもせず歩いてきたさくらを見るとかれんに訊ねる。

「ねえ、かれんちゃん。この娘がこまちの言っていた……」

「はい、私の家で一緒に暮らしている『木之本さくら』さんです」
紹介されたさくらも前に出て自己紹介をする。

「初めまして。木之本さくらです。はじめからこまちさんではないと分かってました」

挨拶を終えたさくらにまどかは驚いていた。もちろん初対面の彼女を『こまち』ではないと認識したさくらのことをぞみ達は驚き、まどかも多少驚愕な表情をしていたが、

「さすがね。こまちが言っていたように貴女は『不思議ちゃん』みたいな力を持つているようね」

と笑いながら言う。さくらは照れくさそうに笑顔で答えた。

「そんな事は無いと思いますよ」

ちょうどナッツハウスで皆が盛り上がっているその時、こまちは自分の部屋でただ黙って座り込んでいた。昨日のナッツの言葉が残っている彼女は、問題の原稿用紙を見つめながら悩んでいた。もう小説を書くのは辞めよう、私には才能が無いと思いつながら。ちょうどそのとき窓の外をピンクが飛んでいくのに気が付く。

「あっ！」

あわてて追いかけて“キャッチ”しようとするが、その部屋を離れた瞬間アクラネアの放ったクモの影が原稿に取り付いた事には気が付かない。

それから数十分後、ナッツハウスの二階へと招待されたまどかは皆と話していた。なぜまどかがここへやってきたのか先ずそれが疑問である。

「どうしてこちらに？」

「ちょっと頼まれ事だね」

訊ねるかれんにまどかは答える。そしてその頼まれ事を説明する。
「うちの豆大福が大好物って誰？」

まどかの質問に皆が一斉にナッツの方を見る。その人物が誰か理解したまどかはゆっくりとナッツの側へ歩き紙袋を渡す。

「こまちに頼まれたの」

ナッツは驚きながらも受け取ると袋を開ける。そこには彼の大好物であるこまちの家、『菓子舗小町』の豆大福が詰まっていた。

「こまちさん優しい」

感心するのぞみとつらら、そしてりんが一言。

「大人だね、それに引き換えナッツも見習いなよ！」

しかしナッツは豆大福を手にながら、少し弱気で話す。

「感想は正直に言わないとためにならない」

そこへ反論するのはかれんとさくら。

「正直に言えば相手を傷つけてもいいの！」

「私も別の言い方があったと思います。良いことは良い、悪い点については具体的に説明をしないとそれこそためにならないのでは！？」

「その説明をしたかったんだ、今日。こまちと会ってちゃんと……」
その様子からナッツも自分が言った昨日の感想について反省はしているようである。しかしそのナッツの言葉にまどかは割り込み一方的に言う。

「ナッツさん、気にしなくていいよ」

「えっ!？」

「少しきつくいわれたぐらいですね、あの娘が弱いただけだからそこへかれんが友人をかばって反論」

「そんなこと！」

「だって、これしきのことと落ち込んでいるようじゃ、しょせん作家になるのは無理よ」

このまどかの言葉に皆が反論する。こまちは図書委員をしながら努力をして執筆している。そして努力を続ければ才能は開花する。

そして何より作品を読んで楽しめたその事実はこのメンバーが証拠である。そこで一人黙っているさくらに訊ねる。

「あなたは!？」

まどかの問いにさくらは答える。

「そうですね。私も、のぞみちゃんやかれんさん達のように、こまちさんを信じていますし、応援したいと思います。でも……」

「でも？」

「まどかさんが言うようにナッツさんにあのように言われただけで、書くのを辞めるのならば、すぐに小説家の夢を諦めるべきだと思います」

「ちよつとひどくない!」

のぞみ達はそんなさくらの言葉に反論するが、冷静にかつ客観的に物事を見ているのはさくらであった。

「しかしナッツさんにはこまちさんの作品を酷評した以上、ちゃんとその理由を説明する責任が有ると思います」

そんなさくらの意見に感心するまどか。さくらに近づくと彼女の頭をくしゃくしゃにしながら誉める。

「全く、本当にたいした子だね!! あんたは! その歳でそこまです理解して考えているなんてね!!」

「いやそんな、とにかく私たちは皆気持は同じなんです。こまちさんを応援したいと」

この最後の言葉“こまちを応援する”でまどかもうれしそうな顔をした。妹は応援してくれる良い友人達を持ったと。

「ありがとう。みんなの激励こまちにしっかり伝えるわね」

まどかは歩きながら皆に別れを言う。

「ごちそうさま。じゃあね」

そんなまどかを引きとめるナッツ。

「待ってくれ! 頼みたいことがあるんだが……」

不思議そうにナッツを見つめるまどか、そしてその二人を見守る五人……。

第四話：カードキャプターの力

「はあ……」

座ったまま、自室で考え込んでいるこまち。先ほど飛んでいたピンキーをキャッチした後もこの調子である。目の前には例の原稿用紙、タイトルは『海賊ハリケーン』。こまちはこの作品をどうするべきか悩んでいた。いやこの作品ではなく自分自身の小説家への夢を諦めるかどうか表現としては正しい。

「こまち！ 入るわよ！」

まどかが叫びながら部屋の扉を開ける。

「お姉ちゃん？」

不思議そうな表情のこまちに姉は告げる。

「お客さんよ」

まどかはこまちを連れ出し、客間へと向かう。こまちがそこ見たのは昨日自分の作品に酷評を述べたナッツ、そしてさくらの二人だった。

「こまちさん……」

さくらがこまちに話かけようとするが、言葉が見つからない。一方こまちはナッツを見ると何か言いたそうではあるが、さくらを気にして話が出来ない。その様子を見たまどかがさくらに話す。

「さくらちゃん、あなた来るの初めてでしょ」

「はい」

まどかは微笑みながら、

「だったらこっちに來たらいいわ。うちの商品試食させてあげるわ」

「本当ですか!？」

「私の新商品もあるから……」

まどかはさくらを連れて出ると二人に言い残す。

「じゅっくじゅ」

客間にはこまちとナッツの二人が残った。お互い何から話せばよいか分からない。二人の間を時間だけが過ぎる。

「小説……書いているのか？」

こまちが抱えた原稿用紙に気が付いたナッツが口にする。

「書いても……無駄だから……」

こまちの答えはまさに“小説家断念”そのものである。彼女は昨日から考え悩んだ結果、自分には才能が無いと思っている。

一方そのころさくらは、店の入り口でまどかに店の商品を見せてもらっていた。

「ここにあるのがうちの商品。この店は老舗の和菓子屋だね」

「ほえ、すごいですね」

さくらは店に並べられた商品を眼に嬉しそうに答える。

「さくらちゃん、お願いが……」

まどかはひとつの和菓子を皿に盛ると差し出す。

「これ、私の新商品なの。感想をもらえるかしら……」

「どうして私に？」

さくらの問いかけにまどかは微笑みながら答える。

「こまちの作品を客観的にとらえられる貴女なら、きっと良い感想がもらえるよ」

まどかは先ほどのナッツハウスにてさくらが話した内容から、彼女の才能を見出していった。さくらは差し出された新商品を一口食べるとゆっくりと感想を述べる。

「甘さが抑え気味な所は年配の方にも好んでもらえると思います。

ただし見た目が派手なところは、もう少し地味にしたほうがよろしいかと……」

「やっぱりあなたもそう思う？」

まどかはさくらの肩を叩く。

「私も気にはしていたんだけど、あなたやっぱすごいね。この商品の実現させた成功部分と足りない部分をきちんと的確に意見できる

なんてね」

続けてまどかは話す。

「小説もいっしょだよ。良いところは誉める。そして足りない部分は意見として述べる。相手の気持ちになっただよ」

「えっ!?!」

「やっぱ、さくらちゃんすげえよ」

さくらのことを誉めるまどかと照れくさそうにするさくら。

「そんな、私当たり前のことを言っただよもりですが……」

「何!?!」

まどかが不思議そうにそちらを見る、しかしさくらは同時に異常な気配を感じた。

(何か出た! まさかナイトメア!?)

「ちよつと!」

まどかの声かけにも答えず、さくらは血相を変えて客間へと走る。「ココさん!、一体何が!?!」

客間には本来の姿に戻った小々田ことココがいた。彼の話ではナツツの言いすぎを止めようと皆が客間に来た時、急に全員が原稿用紙に吸い込まれたと。ココ一人を残して……。

「突然のことだったので僕も驚いたココ」

さくらは原稿用紙に手をかざす。

「皆は恐らくナイトメアの手によってこの原稿の中に引きずり込まれているわ。恐らく小説の世界に……」

「のぞみ達はこの中ココ!?!」

「ええ、助けるわ!」

さくらは不思議な形の鍵を取り出す。それは光輝き宙に浮かび、同時にさくらの足元に現れたのは大きな魔法陣、『カードキャプターさくら』の力が今発動する。

「星の力を秘めし鍵よ、真の姿を我の前に示せ! 契約の下、さくらが命じる!」

さくらは目を見開き、激しく叫ぶ。

「リリースー!!」

その言葉と同時に凄まじい光を鍵が包み、一本の杖に形状を変える。その杖をしっかりと掴むさくら。

「カードキャプターココ……」

「原稿の世界に入り込むわ。まずは……」

さくらがとりだしたのは『翔^{フライ}』のカード。

「我が翼となり、我を空に羽ばたかせ! 『翔^{フライ}』!!」

カードが光り、さくらを包み込むと彼女の背中に大きな羽が生える。しかしそのとき後を追ってきたまどかにその姿を見られてしまう。

「えっ! さくらちゃん……あなた……」

「あっ!!」

さくらは慌てて『眠^{スリープ}』のカードでまどかを眠らせる。

「さくらちゃん……なにを……」

ばたりとその場に倒れ気絶したかのように眠り込んでしまつまどか。

(まどかさん、ごめんなさい)

さくらは続けてカードを取り出しココに言う。

「いまから皆の所に行くわ。肩に捕まって!」

「わかったココ!」

ココはさくらの肩にしっかりと掴まる。さくらは魔法の連続使用で疲労していたが、事は急ぐ。一枚のカードを取り出すとその力を引き出す。

「わが身を別なる空間へと導け! 『転移^{テレポーション}』!!」

カードから放たれた光とともにさくらとココは原稿用紙の中へと消えていく。客間は何事も無かったかの如く元通り、ただ倒れて眠っているまどかが居るだけ……。

「あそこ!」

ここは原稿用紙の中のコまちが書いた物語であろう。雨の強い荒らしの中、空を飛ぶさくらと掴まっているココ。その眼前には一隻の海賊船が有る。そして船の甲板には皆が倒れている。

（やっぱり、ナイトメアの仕業ね）

さくらは海賊船めがけて飛んでいく。こうして仮想世界での戦いが今はじまる。

第五話：嵐の戦い

「あっ!?!」

「ここは?」

甲板上で気絶していた皆が起き上がる。五人とナッツは船の上、物凄い暴風雨の中に居た。

「夢かな?」

りんは隣にいたのぞみの頬を抓る。

「痛い! 痛いよ〜!」

「つてことは夢じゃない……!」

頬を抓られたのぞみは怒りながら、

「りんちゃん自分のでやって……!」

うららとかれんも飛び散ってくる海水の味で、自分達がどこか別の世界に飛ばされたことを自覚する。

「あっ!あの船は……まさか!?!」

叫ぶこまちの目の前には客船が有る。この荒れ狂う海の中、今にも沈没しそうな様子。

「はははは!」

状況を理解出来ていない皆の背後から、ナイトメアの一員『アラクネア』が笑いながら現れる。

「ナイトメア!」

「ここはあなたの作った物語の中よ。気に入って貰えたかしら?」

そう、のぞみ達はアラクネアの陰謀で、こまちの物語『海賊ハリケーン』へと引き込まれたのだ。

「あなたの仕業ね!」

そう言ったかれんを横目にアラクネアは仮面を取り出し、そして叫ぶ。

「ここで全員まとめて片づけてやるわ!」

言い終えると同時に仮面をマスクに投げつけるアラクネア。する

とその仮面を付けられた船のマストは、おぞましい化け物『コワイナー』へと姿を変える。

「みんな！」

「ええ！」

のぞみの掛け声とともに、皆の左手にあるピンキーキャッチユの蓋が開く。眩い光が飛び出し全員が叫ぶ。

「プリキュア！ メタモルフォーゼ！」

光はやがて皆の体を包み込み、戦士『プリキュア』へと姿を変える。

「希望の力と！ 未来の光」

「華麗に羽ばたく五つの心『イエス！ プリキュアファイブ！』」
変身を終えた五人は名乗りを上げる。今まさにプリキュアファイブ対ナイトメアの闘いの幕が切つて落とされる。

「コワイナー！！」

コワイナーは凄まじい勢いで回転すると、体の一部であるロープをプリキュア達に鞭の如く叩きつける。

「あっ！」

「ドリーム！」

ロープで激しく叩きつけられ、ルージュは飛ばされたドリームを助けようとするが、続けて飛んでくる攻撃で阻止されてしまう。甲板上でバク転しながら攻撃をかわすレモネード、そしてルージュに向かって叫ぶ。

「ルージュ！」

「よっしゃー！」

両者一斉にコワイナーに向かって飛びかかり、強烈な打撃を加える。

（やったか！？）

しかしコワイナーには二人の攻撃は通用しない。再度回転したコワイナーはルージュとレモネードを甲板へと叩きつける。その後続く様、ドリームとアクアの同時攻撃が炸裂するがやはり通用しな

い。

「コワイナー!!」

コワイナーは弾き飛ばした二人をロープで縛りあげる。

(しまった!)

二人はなす術もなくコワイナーに捕まり、海へそして甲板へと叩きつけられる。

「つつ強い……」

レモネードが肩で息をしながら呟く。このままではやつらの思うがまま。悔しそくにルージユもアラクネアを睨む。

「ふふ、登場人物は全員海の藻屑となって息絶える。物語はこれでジツエンドよ!」

アラクネアの言葉にミントは愕然とする。

「感謝するわ。あんたの書いた物語のおかげで仕事を達成できるから」

笑いながら告げるアラクネアの言葉にミントは絶望する。自分が書いた作品のせいで皆が危険な目に会っている事実。

「ごめんなさい……私の小説のせいで……」

座り込み謝るミント、その姿に元の姿に戻ったナッツが訊ねる。

「何故謝るナツ? ミントは何か悪いことをしたナツ?」

「えっ!?!」

「物語を良いように変えられて悔しくないナツ?」

「でも……」

「自分を責めて落ち込んで何も変わらないナツ。誰も最初からうまくは書けないナツ」

「ナッツさん……」

その時コワイナーに縛り上げられていたドリームが叫ぶ。

「失敗したらやり直せばいいじゃない! チャレンジは何回だって出来るのだから!」

「ドリーム……」

そしてナッツが叫ぶ。

「だから夢を諦めるなナツ〜！」

「その時戦場に響く声、

「『剣』……！」

そして一筋の光が、皆をしぼるロープを切り裂く。解放されたドリーム達は空を見上げる。

「さくらちゃん!?」

そこには魔法の力で飛翔するさくら、そしてココが居た。

「のぞみ〜助けにきたココ！」

さくらは甲板へと降り立ち、さくらの肩より降りたココがドリムフライングの側による。同時にさくらは『翔』の魔法を解除、彼女の背中に生えていた大きな白い羽が消える。

「ミント、あなた自分の話を勝手に使われて悔しくないの!?!」

「さくらさん……！」

さくらは手にした杖をアラクネアに向ける。

「ミントの話を勝手に踏みじった事! 許しませんわ!」

「おのれ! カードキャプター! まとめて始末してやる」

その時悲しみのため座り込んでいたミントが立ち上がる。

「許さない……この物語は悲劇じゃない!」

「なにい!」

「何が有っても主人公は諦めない! 例え絶望しても再び立ち上がる勇氣を持っているのよ!」

ミントの言葉にアラクネアは反論。

「そんな話はずまんないわ! さっさと終わらせてあげるわ!」

そのアラクネアの言葉と同時に、コワイナーの攻撃が全員を襲う。やられると思ったその瞬間、ミントのピンキーキャッチュが輝き蓋が開く。

「プリキュア! ミントプロテクション!」

ミントを中心に緑色の光がドーム状に拡がり、全員を守るバリアーとなる。そしてコワイナーの攻撃はミントの張ったバリアーで弾

かれる。しかし防戦一方では敵を倒すことはできない。そこへさくらがカードを二枚取り出す。

「複合魔法よ！ 受けてみなさい！」 『シン撃』ト」

さくらの杖に不思議な光が宿る。続けてさくらはもう一枚のカードを指で挟み呪文を詠みあげる。

「我が力よ！ その守るべき者のために姿を変えよ！」 『トランススレシオン
変換』！！」

プロテクションの光がミントの前面に凝縮される。

「ミント！」

「わかったわ！」

さくらの合図とともに、ミントはコワイナーに向けて指を向ける。

「プリキュア！ エメラルドショット！」

先ほどまでの光の玉から、次々と弾丸のような攻撃がコワイナーに向かって打ちこまれる。ミントの力をさくらが攻撃に変換した物である。この攻撃を正面から受けたコワイナーは、仮面を壊され消滅する。

「なっなにさ！ こんな話全然面白くないわ。ふーんだ」

アラクネアは捨て台詞を残し姿を消す、そしてこの場にいた皆が元の世界へと戻る。

気が付けばもう夕方、全員は秋元家の庭にいた。

「帰ってきたの……」

訊ねるかれんに答えるさくら。

「ええっ元の世界です。皆さんの……」

そこでさくらはめまいを感じふらつく。

「さくらさん！ 大丈夫！？」

「ええっちよつと魔法を使い過ぎたみたいです……」

こまちに支えられさくらは話す。言われてみれば小説の世界に入り込み、さらには二枚のカードによる複合魔法と、彼女の魔力はほぼ使い果たしていた。兎に角ミントとさくらの共同で敵を追い払い、元の世界に帰ることが出来た。もちろん失望の中から立ち上がった“ミント”こと“こまち”の強い気持ちがあったことだった……

⋮
○

第六話：それぞれの夢

戦闘を終え自分たちの世界に帰ってきた一同、その中でこまちはある決意をしていた。またそれはナッツも同様。

「ちよつと待っている」

ナッツは庭から客間へと上がる。ふと不思議そうな表情をするが、何事もなかったかのように置いてあった原稿用紙を手にする。

「こまちいいか？」

「ええっ」

ナッツは原稿用紙を持ったまま、こまちの所へ来る。

「この間は説明不足ですまない……」

ナッツの言葉にこまちは黙ったまま頷く。

「直すべき点が多い。だが主人公は悪くない」

意外な感想にこまちは驚く。ナッツは感想を続ける。つい先日の一方向的酷評とは違っていた。

「嵐とともに現れる海賊のアイデアもまあまあだ。うまく活かせば、ましな物になるかもしれない」

誉めているのかそうでないのか、ナッツの話っぷりにのぞみとりんがぼそりと。

「ナッツって……」

「誉めるの下手だね」

横から割り込まれたナッツは言い返す。

「うっ五月蠅いな！」

そして原稿をこまちに渡す。彼から原稿を受け取ったこまちはしっかりと胸に抱く。

「私、書きなおすわ。時間かかるだろうけど……」

そしてナッツに訊ねる。

「書きあがったら読んでくれる？」

「ああ……」

彼は笑顔で答えた。一時は小説家の夢を諦めた彼女であったが、友人達に支えられ立ち直った。

「こまちさんの思いがあれば大丈夫ですわ」

「さくらさん？」

「あの時、私の魔法はこまちさんの強い『思い』に答えたのです。こまちさんの小説への強い思いが……」

「そうだったの……」

さくらは微笑み返す。そのときナッツが思い出したように告げる。「ところでまどかが倒れているが……」

このナッツの言葉に焦るさくら。

「ほへ〜！ 私、まどかさんを魔法で眠らせたままでした！」

「えー！」

あわてるさくらにのぞみが訊ねる。

「さくらちゃん、まだ魔法は使えるの？」

「いいえ、もう私の力は使い切りましたから」

困った様子のさくらに聞くのはかれん。

「ではこのまま眠りっぱなしなの？」

「いや、時間が来れば目覚めると思いますが……」

そこへのぞみが割り込み、

「だったら問題ない。なんとかなるな！」

楽天的なのぞみの口癖に皆がため息を吐く。そんな一同の様子も知らず、まどかは客間で大イビキ。魔法の効力が切れた時、彼女は起きるだろう。そして自分のみつともない姿に驚くに違いない。

そして後日、ここはサンクルミエール学園。カフェテラスでさくらとこまちが言い合っている。

「どつしたのさくら？」

「かれんさん助けて下さい！」

さくらはかれんの後ろに隠れる。

「こまち、これはどついうこと？」

「いや、この前のさくらさんの活躍が忘れられなくて……」

「あの魔法のこと？」

「そこで彼女をモデルにした魔法少女の作品を書こうと思っているの」

そこへ他の三人、のぞみ、りん、うららがやって来る。先ほどの話を聞いていたのであるう。うららがさくらに言う。

「すごいじゃないですか！ 主役ですよ！」

「でも、参考なら兎も角モデルにだなんて……」

「しかし先日協力するようなこと言ってたよね」

笑いながら話すりん、しかしさくらは首を横に振る。そこへのぞみの一言。

「さくらちゃん、小説の主役にけっしていい！」

「ほへへ！ そんなあへ」

さくらは困り果てていた。しかし内心嬉しくもあつた。友人として迎えてくれるこのプリキュア戦士五人と生活を送れることが。今ではさくらにとってかけがえのない友人達。そんな楽しそうな彼女たちの姿を遠くから小々田が見ていた。

（皆、つまづいても立ち上がるんだ。強い思いがあればきっと夢は叶うよ）

そう、皆の夢はそれぞれ違つが諦めなければきっと……。

カードキャプタープリキュア外伝 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9320f/>

カードキャプタープリキュア外伝～小説家の試練～

2010年10月8日10時31分発行